



## 日本海区水産試験研究

# 連絡ニュース No. 363

### イギリス・アメリカ訪問記

平川 和正

平成4年度一般別枠研究『地球環境』(地球環境変化に伴う農林水産生態系の動態解明と予測技術の開発)に関する海外調査のため、特に温暖化が餌料生物種個体群の動態に与える影響について調査研究している欧米の代表的海洋・水産研究所を訪問した(平成5年1月30日～2月15日)。また、国際GLOBEC(GLOBal Ocean ECosystem Dynamics: 地球環境変化と海洋生態系動態の関連についての国際共同研究計画)のコア・プログラムの一つである「動物プランクトン個体群動態と海洋物理環境の変動過程」に関する国際作業部会(PDPV-WG)の第一回会議に出席した。これらの機会を通じて、各国第一級の研究者と意見・情報を交換し、研究実態の把握に努めたので、その結果について概説する。

#### 「動物プランクトン個体群動態と海洋物理環境の変動過程」に関する国際作業部会(PDPV-WG)第一回会議(2月1～2日、ケンブリッジ)

会議に先立ちSCOR議長を兼務するMcCave教授(会場となったSt. John's Collegeの特別研究員)が歓迎の挨拶と国際GLOBECへの期待・抱負を手短に述べられた。引き続き、このWGのまとめ役であり、かの著名なイギリスの水産資源学者D. Cushingさんを座長とし、参加者27名の自己紹介の後直ちに本論に入った。

本会議では動物プランクトン主要群であるかいあし類の個体群動態に焦点を絞り込み、野外における解析手法の確立に向け論議を深めるために、11名が話題提供した。論議では、各生活史パラメータ、特に産卵量と死亡率の

再検討、野外における同一コホートの追跡・採集方法、被捕食者(餌生物)と捕食者(稚仔魚)との相互作用などが主な論点となった。例えば、(1) *Calanus*を使った現場産卵実験では、産出卵数と摂食量との関係が必ずしもパラレルではなかったことから、卵生産から推定される植食プランクトン現存量を従来通り単に現場のクロロフィル $a$ 量だけで決定するには注意を要すること、(2)餌の質を取り上げた飼育実験と同時に、両者の時空間的不連続性を解析するため、短いタイムスケールでの観測データを取得する必要があること、(3)また、情報量が極端に少ない自然死亡率もすでに卵の初期発生過程において親の採った餌の善し悪しに影響されるらしいこと等が議論された。しかし、自然界では、何と言っても、私達のウイーク・ポイントである捕食圧が死亡率の主要因として予想される。野外における測定方法については、光学・音響効果を駆使し、被捕食者と捕食者の出入りをチェックするBox型測器の改良がコア・プログラムの一つであるSampling and Observation Systems(SOS)-WGで進められている。捕食圧は餌料生物種の個体群動態の解析に際し不可欠な要素であるばかりでなく、その結果から更に高次生産者の動態を評価するうえでも重要な意義をもつと言えよう。問題の早期解決を図るために、プランクトン研究者だけではなく、広い専門分野における研究者それぞれの取り組み姿勢が今まさに問われているのではないだろうか?これが国際GLOBECの“ねらい”(杉本, 1992)でもあるような気がした。

## 自然史博物館動物学（前大英博物館自然史）部門（2月4日、ロンドン）

日本海の回遊性浮魚類、カタクチイワシ等の初期餌料として注目している暖海性かいあし類 *Oncaea venusta* には、生態的（日周鉛直移動）にも異なる2つのform (f. *typica*とf. *venella*) が知られている。日頃私自身はそのキー（特に、雄）に困惑していたが、査定に必要な知識と分類体系に関する記載論文を G. Boxshall さんから入手することができた。一般に馴染みが薄い *Oncaea* 属にはまだまだ生態学的に未知な種が多く存在するようである。ダーウィンのコレクションを眺めた後、動物プランクトン標本庫を覗いてみた。貴重な標本が観たい時直ぐに、気軽に手に取れるように陳列してある。標本を維持・管理することの大切さより、それを利用する研究者の立場を重視した保管方法であることが感じられた。

## プリマウス海洋研究所（2月5日、プリマウス）

動物プランクトンの摂餌・産卵生態、フロウ・サイトメータを使った低次生産系におけるエネルギー収支の解明、温暖化 ( $\text{CO}_2$ 增加) と植物プランクトン（円石藻類）の形態変異との関連、ビスケー湾における暖水渦の形成・移動・消滅過程の解析など多岐に亘る研究分野を精力的に推進している。その多くの業績は各方面で脚光を浴びている。地球規模での炭素循環を取り扱った共同研究プロジェクト BOFS (Biogeochemical Ocean Flux

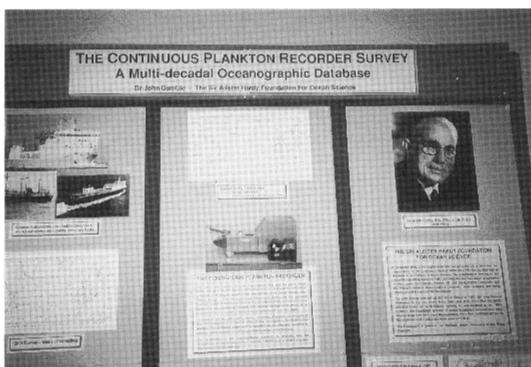


写真1 ハーディ連続プランクトン記録器（中央）とそれを曳航する商船（左上）。右上はCPR調査の創始者故 A. Hardy卿。

Study) の成果を踏まえながら、今度は  $\text{CO}_2$  増加に対するプランクトンの応答性、即ち、固定能力の変化を明らかにしようとする新規プロジェクト PRIME (Plankton Reactivity In the Marine Environment) を計画中である。

他方、時代のニーズに応じたこれらプロジェクト研究とは対照的に、1932年から北大西洋の広範囲に亘りプランクトンの長期変動を連続と監視し続けている慈善研究団体 (The Sir Alister Hardy Foundation for Ocean Science) がある。そこでは、商船を有効利用した水平連続採集記録 (CPR: Continuous Plankton Recorder) 調査による膨大な蓄積資料をみることができた。このモニタリングは故 A. Hardy卿が自ら考案発明した連続プランクトン記録器を用いて立案・企画したものであり（写真1）、アイデアとして気象学の分野で実用化されている方法論を取り入れている。これらデータは、1980年以降北海における動・植物プランクトン量の増加現象を自ら語り始めており、恰も北大西洋の表面水温、更に地球全体の気温のトレンドに同調しているかのような結果を示している（図1）。また、驚いたことには動物プランクトンのうち、主要かいあし類 *Metridia lucens* と *Corycaeus anglicus*

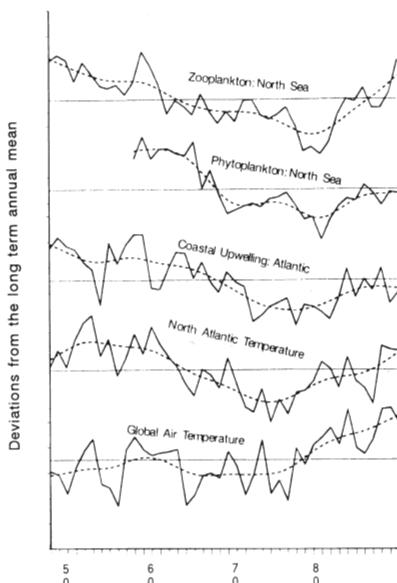


図1 1948～1989年までの北海における動・植物プランクトン出現量、北大西洋における風の影響力（沿岸湧昇流の指標）と表面水温及び地球全体の気温の経年変動 (Colebrook等, 1991)。

の出現量も類似した経年変動を示している（図2）。

今後果たしてどのように推移していくのか？そして、日本海においてもそのような兆候を示す種が棲息しているのか？もし、棲んでいたとしたら、その種の生理活性や生活史すらも変化する可能性があるのか？好奇心が募る。これからモニタリングは“海の定期検診”として地球の健康状態をチェックするための単なる手段としてだけではなく、生物現象の“規則性の崩壊”（谷口, 1991）を探知するうえでも貴重な手掛りともなり得ると私は思う。CPRグループは、現在この調査を将来地中海、インド洋、更に太平洋にまで拡張する準備計画を地道に進めている。

スクリップス海洋研究所（2月9日、ラホヤ）

Marine Life Research Group (MLRG) のボスであるM. Mullin さんから、イワシ漁業の壊滅的打撃を契機に1949年から始まったCalCOFI (California Cooperative Oceanic Fisheries Investigations) 調査の目的、実績とその社会的役割について話をうかがった。この調査のゴー

ルはカリフォルニア海流系における生態系ダイナミックスを解明することである。そのため、イギリスのCPR調査と異なり、物理、化学、気象、更に水産資源分野までを網羅した“共同研究 (collaboration)”としての特徴をもたせているとのこと。サイト内に設置された衛星海洋学研究施設は、空からの情報収集が海の生態系研究の発展に大きく貢献していることを裏付けている。MLRGのスタッフ達はこの調査を国際研究計画、例えばGLOBECを通じて将来のグローバル・チャレンジのための有効戦力・原動力として活用していきたいと主張していた。

また、環境変化に対応した一連の動物プランクトン生産諸要素（摂餌、排泄、産卵等）を実験室で測定しているM. Checkleyさんと、卵生産に対する餌（量・質）の影響を調べるために実験デザインについて討論し、貴重なコメントを得た。これらの野外調査及び飼育実験によって蓄積されたプランクトンの生理・生態学的知見に基づき、メソスケール生態系を対象にした第二次生産量の算定方法は世界的にも高く評価されている。

南西区水産研究センター（2月10日、ラホヤ）

CalCOFI調査に参画し、同海域における高次生産者、特に産業的に重要なマイワシ及びカタクチイワシの資源変動機構を解明するため、生残、成長、産卵、移動などに関する総合的調査研究を進めている。その結果、栄養分に富む南下流の衰退がイワシ資源量の減少をもたらすことを明らかにした。この現象は地球的規模で影響を及ぼすエル・ニーニョ発生と密接な関連をもつと言う。その複雑な因果関係を海洋環境（海流系の拮抗作用とそれに伴う餌環境の変化）から究明するため、隣接するスクリップス海洋研究所のMLRGが共同研究を通じ強力なバック・アップを行っている。

P. Smithさんから、ADCP（音響ドッpler式多深度流速計）を使った動物プランクトン・パッチの調査結果を、J. Hunterさんは、産業科学研究所としての研究体制の在り方と斜陽化しつつあるアメリカ南西部における水産業の実情について説明を受けた。

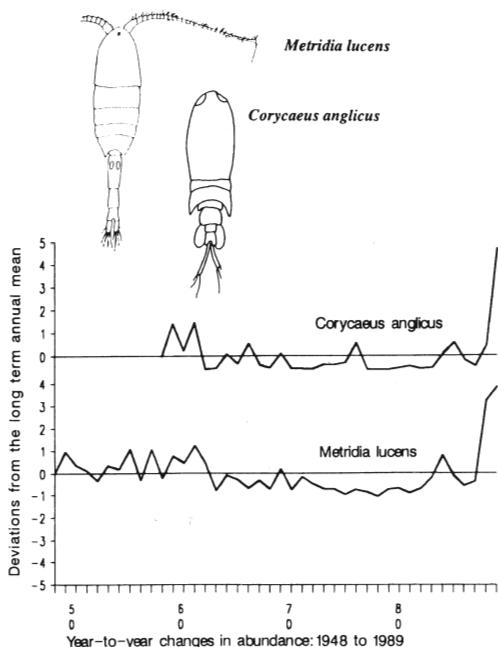


図2 1948～1989年までの北海におけるかいあし類 *Metridia lucens*と*Corycaeus anglicus*の出現量の経年変動 (Colebrook等, 1991)。

カリフォルニア大学（デービス分校）環境科学研究所  
US—GLOBEC研究室（2月11～12日、デービス）

北太平洋産かいあし類 *Metridia pacifica* の生活史を研究した H. Batchelder さんと、個体群動態の解析に必要なパラメータ、特に産卵速度の実験室における測定方法について議論した。彼は現在 *M. pacifica* と近縁種であり、北大西洋冷水域に固有な *M. lucens* の個体群動態をも研究している。CPR 調査の結果から、(1)この *M. lucens* を温暖化指標種として見做すためには、野外における出現傾向を追跡しながら、温度耐性からみた本種の生物学的諸特性（環境変化に対する応答の仕方）を明らかにする必要があること。また、(2)今後、『地球環境』研究の深化を図るうえで、マクロ的視野からみた息の永い“場の研究”と人為的環境条件下で個体レベルの代謝機能を測定、解明する“実験研究”とのカップリングが最も重要な鍵になることを再認識させられた。

今回の調査旅行では海洋生態系、特に動物プランクトンを中心とした低次生物生産機構の解明と生物モニタリング調査に関する研究動向を調べた。欧米諸国でも地球環境変化（温暖化）が海洋生態系に与えるインパクトの強さを予測しようとする調査研究に関心が高まっている。しかし、その欧米諸国でさえ研究体制は未だ充分とはいえない、信頼できるメカニズム解明までには至っていないのが現状であるように感じられた。

## 文 献

- 杉本隆成（1992） 海の研究. 1: 297-300.  
谷口 旭（1991） 水産海洋研究. 55: 377-380.  
Colebrook, J. M. et al. (1991) 60 years of the CPR survey, The Sir Alister Hardy Foundation for Ocean Science. Plymouth, 24pp.

(ひらかわ かずまさ 日水研海洋環境部)

## 改修された海水取水施設について

飯 倉 敏 弘

昭和51年に飼育実験用として作られた海水取水施設は、取水管の老朽化に加えて前面の離岸堤の延長により漂砂の影響を受け、大量の砂を吸い込んだり、しばしば取水塔が埋没する事態を生じていた。離岸堤内は、天然ガスの処理地下水が放流されたり、冬期には新潟市内の雪捨て場になることなどから水質も次第に悪化してきた。

今度の改修にあたっては、漂砂の影響を極力少なくすること、安定した海水を取ることを条件に検討した結果、取水塔を離岸堤の外側に延長する外はないという結論に達した。水深10m以深に設置すれば漂砂の影響は少なくなるが、建設費と維持管理費が膨大となり実行上困難な金額になる。たまたま、平成元年度に隣接する新潟市水族館「マリンピア」が、水深6mに取水塔を設置して以後支障なく運転していることも考慮して、同じ水深に設置することにした。その結果、管路延長距離は旧施設の112mから320mへと大幅に延長されることになった。取水量を毎時50tと旧施設の半分にしたので、管径は以前

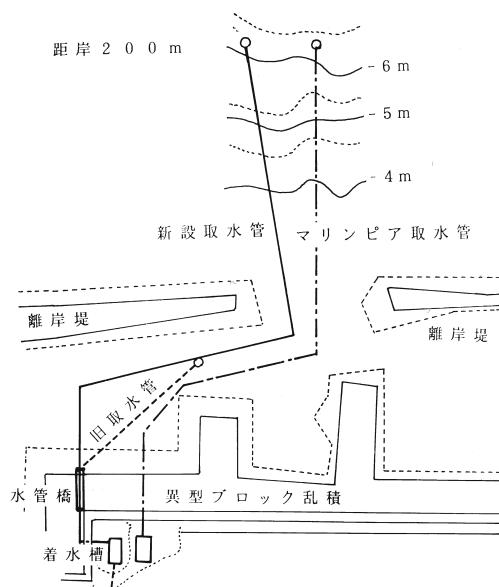


図1 海水取水管敷設平面図  
(白丸は取水塔、旧取水管は撤去)

と同じ250mmとし、耐久性を考慮して内外面をナイロンコーティング仕様にした。

一方、日水研構内にある濾過施設も壁面が膨張して亀裂が入り、接続管からしばしば漏水して施設維持のうえから危険性が指摘されていた。旧施設の地下貯水槽とポンプ室は残し、他はとりこわして圧力式急速濾過機を新設した。予算の関係で高架水槽は見送ったので、飼育施設への送水はインバータ制御によるポンプ圧送方式にした。濾過機は毎時50tのもの1台としたが、維持管理のうえから将来さらに1台増設する必要がある。

飼育を基とする研究も、次第に高度化・精密化が進んで来ている。このような情勢を念頭にいれて、ペントス

を中心とした生理・生態研究に活用したい。

この改修工事は、旧施設の撤去工事の他に、埋設機雷に関する磁気探査、県の海岸保全事業がらみの調整を受けた水管橋の補強やその他の若干の工事が加わったので予算面で苦労したが、技術会議整備課及び水産庁研究課には特段の配慮を頂いた。設計施工にあたっては、官房経理課にお世話になった。工事の際には、新潟海上保安部、新潟県水産課、新潟県新潟土木事務所、新潟市水産課、新潟市水族館「マリンピア」の各位に、また、共同漁業権区域内からの取水については新潟市漁業協同組合のご理解とご協力を得た。厚く御礼申し上げる。

(いいくら としひろ 日水研資源増殖部長)

#### 新規購入機器紹介

### 顕微鏡ハイスピードビデオ

平川 和正

ける餌料プランクトン群集の生態特性が精確に把握できるものと期待している。

(ひらかわ かずまさ 日水研海洋環境部)

平成4年度一般機械整備費により、顕微鏡ハイスピードビデオ（ナック社製MHS-200型）を購入した。本器は生物分野での微生物や精子等纖毛、鞭毛運動の研究、プランクトンの行動研究等における生体現象解析に充分な解像力、明るさ、分析性能を備えており、毎秒200コマの高速撮影ができる。また、多種の光学顕微鏡に取り付けることが可能である。

本器を用いて、野外より採集した各種プランクトンの交尾行動、産卵生態、初期発生過程、摂餌時における口部諸器官（付属肢）の動き、被食-捕食関係、遊泳等の諸行動を連続的に観察・撮影・録画し、更にビデオテープの再生から行動様式やそれに要する運動エネルギー量を定量的に解析するなど、種固有の行動生態の詳細を具体的に明らかにしていきたい。得られた成果と他の個体群特性とを組み合わせることによって、海洋生態系にお

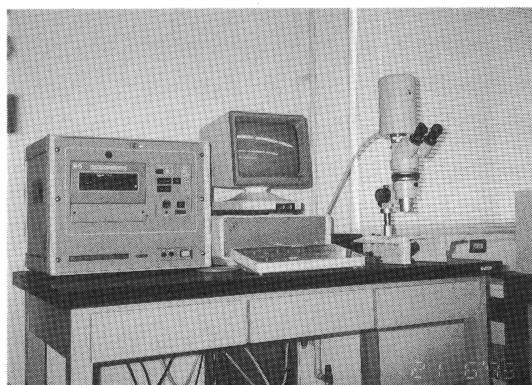


写真1 顕微鏡ハイスピードビデオ  
(ナック社製MHS-200型)

## 退 任 の ご 挨 捭

北 村 勝 哉

平成5年3月31日みずほ丸を下船、定年退職致しました。

昭和22年の春、秋田県の山奥から憧れて出てきた東京での食糧難の生活に耐えかねた私は、望郷の念にかられながらも帰郷を思いとどめ、漁師を志して千葉県の勝浦へ行きました。勝浦の県立漁村道場へ入場した1年後に、現地で建造中の第二旭丸に採用されて乗船したのが昭和23年6月。間もなく、農林省水産試験場香住分場へ配属された船はそこで底引き漁で収入をあげる傍ら調査観測をしていた訳ですが、船の性能と言い、労働量と言い、今から思うと正に隔世の感がします。

嘘のようですが、あれから40年以上の歳月が流れ、退

入所して間もない日のことです。部長から「これを描いてみなさい」とスケトウダラ1尾を渡され、自分ではなかなか巧く写生できたと思ったものが、「これでは駄目ですね。図鑑のように描かなければ」と注意され、「ここは学校ではない。研究所なんだ」ということを思い知らされました。あれから40年、入所当初には思いも及ばない程の長い年月を、多くの方々の御好意に支えられ、護られて定年退職の日まで何とか勤めさせて頂きました。直接お礼の言葉を申し上げられる方には勿論のこと、日水研を去られた方々や、既に遠いところに旅立つてしまわれた方々にも感謝の念で一杯です。

人よりトラックの方が威張って通る万代島の旧庁舎は

日本海区水産研究所が新潟（今の佐渡汽船所在地）に移転してからまもなく入所し、以来40年余り勤務させて戴きました。当時はバス停から水研まで両側に石炭の山が続き、道路は砂利道でしたので雨・風・雪の時は洋傘の修理で大変でした。また、強いホルマリンの匂いの中での仕事、新潟大火、新潟地震等、今思い返すとさまざまなことがありました。

近年は特にOA化が進み、コンピュータ操作などむず

職の日を迎えることになりました。長い間には多少のことはありましたけれど、大事になる怪我や事故もなくやってこれたのは本当に良かったと思っております。

私は、若い時、辞めようと思って漁船に就職する準備をした事があります。それは、同じ年頃の漁師の歩合を聞くと、自分の給料の余りの安さに嫌気がさしたからですが、結局は最後まで皆様方から暖かい御交誼を頂いて、定年を迎える事ができたのは、ここが居心地が良かったからに外ならない次第です。本当に有り難うございました。厚く御礼申し上げます。簡単ですが、船の安航と皆様の御多幸を心から祈って、退職の挨拶にさせて頂きます。

(きたむら かつや 前みずほ丸操機長)

本 間 瞳 子

信濃川の中につき出た半島の先の方にありましたので、調査船の出航時にはみんなで見送ってあげることができました。地震の為移転した現在地は、海には近くなりそれを充分生かして研究も進められていますが、乗船調査に出発される人を見送るのはほとんど玄関で「気を付けて」と声を掛ける程度になってしまいました。でも気象条件によっては雪におおわれた佐渡の島が朝日を浴びてバラ色に映える素晴しさに感激できるのも海に近いせいです。沢山の想い出を本当に有難う存じました。皆様のより一層の御活躍を心からお祈り申し上げます。

(ほんま むつこ 前資源管理部主任)

片 桐 久 子

かしい面もありましたが、すばらしい方々に支えられて楽しく仕事が出来ましたことを終生忘れることはないと 思います。これからは趣味の観葉植物の栽培や、若い頃習ったことをもう一度時間をかけて楽しみながら上達させていきたいと思っています。皆様方の益々のご活躍とご健康をお祈りし、公私にわたり大変お世話になりました事を心から厚くお礼申し上げます。

(かたぎり ひさこ 前資源増殖部併海洋環境部主任)

## 着任のご挨拶

藤本 實

平成5年4月1日付けで西海区水産研究所企画連絡室長から配置換えとなりました。昔、一世を風靡した対馬暖流一齊調査で知られる日本海区には、以前から一度は勤務をしたいと念願しており、今回、入所30年目にしてやっと望みを果たしました。これまで、約20年にわたる東海区水研海洋部時代には、卵稚仔輸送や海洋肥沃化に係わる黒潮の機能や構造に関する調査研究で苦しいが貴重な経験を積み、また、高知での南西海区水研海洋部時代の6年余は海況予測、赤潮環境、流れ藻の流動、浮魚礁の魚群調査機能に係わる調査研究で、時には目尻が下

新緑とともにやって来ました。十数年前この水研にお世話になった頃を思い出しながら現在の日水研を見てみると、規模・人員も増えて、四季の変化に富んだ日本海に見えてくるようです。

さて、自分自身が少し歳をとったせいか、職員の皆さんもだいぶ若返っているようで、昔のようなわがままができない環境のようです。

私の性格を知らない人に、この場を借りて紹介しますと、短気で単純で短足ですから、これを念頭においてい

平成5年4月1日付で、日水研みずほ丸に操機長として着任しました。

新潟県岩船郡外海府村中学卒業後、1月も家に居ることなく、水産庁新知丸に乗船しました。この船には、親子二代にわたり乗船する事になりました。それも、昭和27年で終わり、新船として白嶺丸が出来たのです。

はじめまして。4月1日付けで、海洋環境部生物環境研究室に配属されました。私は山口県の生まれで、大学を福岡で、そして大学院生として熊本県の天草（長崎県ではありません）で11年の月日を過ごしてきました。ですから、これまで温暖な九州・山口の生活しか知らず、北国で暮らすことになるとは、考えてもいませんでした。

がるような嬉しい経験も味わうことができました。また、長崎の西海区水研では、海洋環境部長、企画連絡室長職を勤める傍ら、赤潮被害防止のための有明海のシミュレーションモデル作りや雲仙普賢岳の噴火に伴う海域汚染調査の取りまとめ・調整に四苦八苦したのが良い思い出となりました。この雑多な経験を生かして、日水研は勿論のこと、日本海ブロックにおける水産研究の発展と水産業の振興に取り組みたいと考えています。どうか皆様のご支援とご協力を切にお願いいたします。

（ふじもと みのる 企画連絡室長）

早川陵穂

ただければ、私との接触は、簡単かと思います。日がたつにつれて「生意気」になっていきます。

日水研の好きなところは、自然に恵まれていることと、夕日がきれいなことです。酒も少し好きですが、通勤の関係であまり飲めないのが、今現在の悩みの一つです。

いずれにしましても、皆様よろしくお願いします。

（はやかわ りょうほ 庶務課庶務係長）

中村晴一郎

白嶺丸に5年間、その後東海区水研（今の中央水研）陽光丸、旧水産庁昭洋丸、新水産庁昭洋丸、遠洋水研俊鷹丸に15年、白萩丸に5年、そしてみずほ丸です。

よろしくお願いします。

（なかむら せいいちろう みずほ丸操機長）

西濱士郎

初めての事ばかりで、御迷惑をかける事も多いと思います。どうか宜しく御指導下さいますよう、お願ひいたします。

天草では、理学部附属の臨海実験所に所属して、岩礁潮間帯の生物群集を研究していました。扱っていた生物は、ヒザラガイやフジツボなどで、水産とは縁の薄いも

のでしたが、天草は水産業が盛んな所、自然と漁師さんとの付き合いもできます。焼酎を飲みながら世間話をすれば、「魚が減った」、「海が汚れた」といった話もよく耳にしました。私がいた10年の間にも、天草の海も随分

私は今年、新規採用で日本海区水産研究所に配属になりました。私の故郷は茨城県の片田舎の為、新潟をはじめ、日本海側の地域とはこれまで余り馴染みがありませんでした。また、新潟はテレビの天気予報（関東甲信越地方の）でみると、いつも他の所とは違う天気（なぜか雨か雪）のため、小さい頃より不思議な地域という印象を持っていました。そのためこの地に馴染めるかどうか現在不安があります。

そのような不安をよそに、配属が新潟に決まることを友人に話すと大抵、「新潟はスキー場が近いうえ、酒や米は旨いし、いいじゃないか」といった返事がかえつ

この度4月1日付けで日本海区水産研究所に採用され、庶務課会計係に配属となり、過日着任いたしました。当所は海に近く、付近は静かで環境のよいところだと思います。また、新潟は私の生まれ育った土地でもありますので、この地に着任できたことをとても嬉しく思っております。

職場の雰囲気には、おかげさまで少しずつ慣れてきております。しかし、伊達に新高卒者をやってはおりませ

と様変わりして、種々と考えさせられました。九州の海辺での経験が、こちらで少しでも役に立ち、現場に生かせれば、と願っております。

(にしば しろう 海洋環境部生物環境研究室)

### 木 所 英 昭

てきます。こちらに来てまだ幾日も経ちませんが、実感としましては、米の味はよくわからないが、酒の方はなかなか旨いというところです。そのため自称「やや酒乱」の私としてはやや不安でもありますが、今後の生活において楽しみでもあります。

ジョギングが趣味で体を動かすことが好きな私ですが、頭を使うのは得意でないというのが本音です。いい加減な所も若干ありますが、研究者として多少なりとも使える人間になるよう頑張りますので、よろしくお願ひします。

(きどころ ひであき 資源管理部浮魚資源研究室)

### 大 澤 祐 規

ん。まだまだ未熟者です。仕事面では解らないことがたくさんあります。一人前に仕事が出来るようになるまでには多くの時間がかかり、周囲の方々にも多大な御迷惑をおかけすることになると思いますが、精一杯努力するつもりですので、御指導、御協力の程よろしくお願ひいたします。

(おおさわ まさき 庶務課会計係)

## 転 任 の ご 挨 捶

### 池 田 勉

了には到りませんでしたが、主要種についてはその概略の知見を得る事ができ、結果は今後、発表してゆく所存です。何れの仕事も水産業者の利害に直接結びつくものではありませんが、日本海の生物生産構造・環境収容力の把握に必要な基礎的資料となるものであり、日本海の生物海洋学の進展にささやかながら貢献できたと自負しています。

これまでの皆様からの御助言・御協力に感謝すると同

この度、西海区水研に移ることになりました。日本研には6年11か月いたことになりますが、この間の私の仕事をふりかえると、最初の5年間は深層水撒水による水域肥沃化プロジェクト、残りの1年11か月は重要動物プランクトンの生活史解明について研究いたしました。深層水のプロジェクトでは関係県研究者の多大な協力により、予算規模に充分見合う成果を挙げる事ができたと私は思っています。動物プランクトンの生活史の研究は完

時に、今後皆様の日本海研究がますます御発展する事を御祈り申し上げます。

今から10年前に6年ぶりに新潟に戻り、この4月に再び日水研を離れ、横浜移転を控えた中央水産研究所に転勤することになりました。Uターンした当時を思い起こしますと、平凡でのんびりとした生活を夢見ていたわりにはスリルと興奮の連続で無我夢中に過ごした10年でした。余裕のない分だけ独りカリカリして周囲に気を使わせることになったのではと反省しております。今までそうでしたが、どんな困難な状況に遭遇しても真摯で懸命に立ち向かえば、道はひとりでに開けてくるものだということをより実感できたことは大きな収穫でした。

今度、転勤する中央水研はかつての東海区水研当時に

昭和56年4月に採用されて以来12年間、振り返ってみると、あっという間に過ぎ去ってしまったように感じます。素晴らしい環境と職場に恵まれ過ごしたこの12年間は、これからもずっと忘却されないものとなると思います。

これから始まる新任地での仕事と生活に、日水研で学

このたび、本序船の白萩丸に転船になりました。

まだ新潟に赴任して、2年しかたっておらず、ようやく、日水研の方々や、みずほ丸の仕事にも、慣れはじめてきたばかりでしたが、思いがけなく転船の話がきました私自身びっくりしております。

佐渡は私の実家でもあり、新潟を離れがたい気はありますけれども、話しがあったのも、なにかの縁でもあり、どこにいても、同じ水産庁であると思い、東京に出るこ

4月1日付で水産庁白龍丸に配置換えとなりました。昭和59年10月1日付で水産庁照洋丸よりみずほ丸に司厨員として赴任して以来8年6か月間、ケガや病気もなく無事勤務できることは水研職員、みずほ丸乗組員の御指導と御協力があったからと心から感謝しております。

みずほ丸に乗船して日本海を北から南へと色々な港へ入港できること、イカやマスの調査で新鮮な魚を料理し食すことができ大変勉強になりました。

(いけだ つとも 西海区水研海洋環境部長)

### 坂 上 純 郎

4年過ごした言わば古巣でもあります。ちょうど桜の花が満開の頃に赴任して参りました。移転を間近かに控え当分忙しい日々が続くことになりそうです。

日水研在勤中は研究所の皆様をはじめ多くの方々に大変お世話になりました。本誌面をお借りしまして、今までのご厚情に感謝を申し上げ今後とも変わらぬご指導ご鞭撻の程をお願い申し上げます。皆様方も中央水研に来られることがありましたら是非お立ち寄りください。秋には新しい研究所でお会いできると思います。

(さかうえ すみお 中央水研総務部会計課課長補佐)

### 坂 井 友 信

んだこと、経験したことを生かし、精一杯取り組んでいきたいと思います。

長い間皆様には大変お世話になり、本当にありがとうございました。

(さかい とものぶ 中央水研総務部庶務課厚生係長)

### 古 川 修 悟

とにきめました。

こんどは、取り締まりという分野で、また新たな生活が始まりますけれども、調査船での経験をすこしでもいかせるように、がんばっていきたいと思います。

短い間ではありますが、みなさまのおかげで、樂しい日々でした。またどこかでお会いできることを、樂しみにしております。ありがとうございました。

(ふるかわ しゅうご 水産庁白萩丸操舵手)

### 片 野 勝

入庁して以来照洋丸、みずほ丸と調査船に乗船できることは私にとって最高の宝です。

今後白龍丸乗組員としてみずほ丸で学んだことを大いに役立たせて行きたいと思います。

最後に日水研の御発展とみずほ丸の御安航を祈願して転任の挨拶とします。

(かたの まさる 水産庁白龍丸司厨員)

## 事業紹介

## 地域海洋情報の所在情報整備による 所在情報検索システムについて

藤 本 實

海上保安庁水路部（日本海洋データセンター）が昭和62年度から日本周辺の沿岸域を対象に整備を進めている

“所在情報検索システム（地域海洋情報整備推進事業）”に関する情報を入手しましたので紹介します。

このシステムを用いると、全国各地の海洋関係機関等が保有する海洋に関する調査報告書・図面等の資料について手軽に検索し、資料を探し出すことができます。検索は、海上保安庁水路部「海の相談室」及び全国11か所にある管区「海の相談室」で照会に応えていますが、協力機関である都道府県の水産・海洋関係機関にもシス

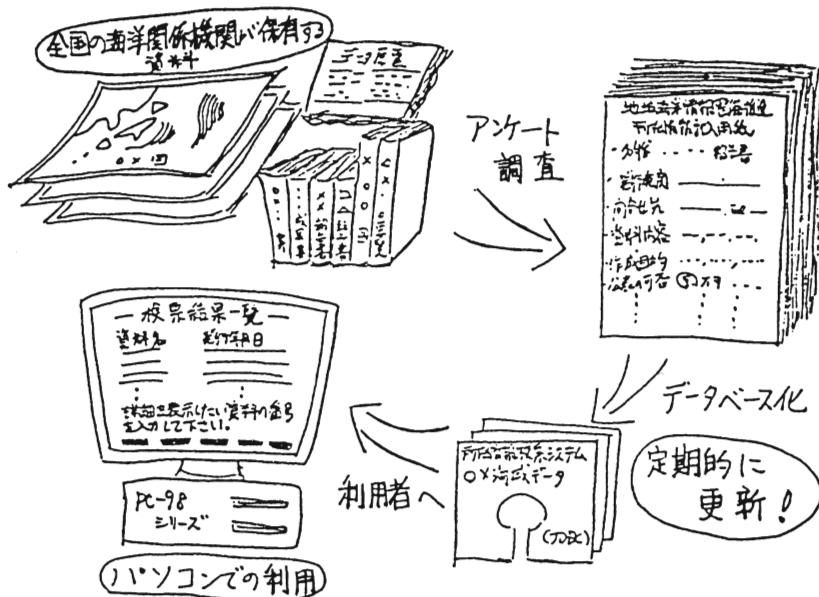
テムのFDが配布されますので、お手元のパソコンで利用が可能です。

平成4年度には、第九管区海上保安本部を中心となって、富山湾（七尾湾を含む）に関する海洋情報の所在整備が行われ、この度その作業が終了しました。

また、平成5年度には中部日本海（新潟県～石川県）、東北日本海・陸奥湾（青森県～山形県）について整備が進められることになっています。

（ふじもと みのる 日水研企画連絡室長）

### 地域海洋情報整備推進事業による所在情報の管理



(海上保安庁水路部所在情報検索システム利用案内より抜粋)

## 《刊行物ニュース》

奥村 卓二  
飯倉 敏弘

## 日本海ブロック試験研究集録 第26号

日本海における表面・50m・100m・200m各深水温の月別累年（1961～1990年）平均値とその標準偏差  
平成5年3月

## 日本海ブロック試験研究集録 第27号

増養殖研究推進連絡会議報告（平成3年度）  
平成5年3月

## 日本海ブロック試験研究集録 第28号

イカ類資源・漁海況検討会議研究報告 平成5年3月

日本海区小型底びき網漁業漁場別漁獲統計調査資料（1991年）  
平成5年3月日本海区水産研究所研究報告第43号  
平成5年3月

## 《所内談話会》

平成5年2月25日

開放型砂浜海岸の栄養物質供給経路を探る  
木暮 陽一

超小型データロガーの開発状況と水産生物への応用  
梨田 一也

平成5年3月29日  
新潟県北部沿岸域における産卵期のヒラメ成魚の移動状況  
梨田 一也

新潟市五十嵐浜地先におけるニラミハゼの分布および食性  
藤井 徹生

野口 昌之

輿石 裕一（西水研）

廣田 祐一（南西水研）

実験室で飼育された日本海産 *Neocalanus cristatus* の咀嚼器構造  
平川 和正

笛川 一郎（日歯大）

種々の水温下におけるツノナシオキアミ (*Euphausia pacifica*) の成長と代謝活性について  
井口 直樹

池田 勉

砂浜海岸での栄養塩類供給への浸透水の寄与について  
佐藤 善徳

木暮 陽一

## 《会議レポート》

## 日本海ブロック水産業関係試験研究推進会議

日 時 平成5年2月17日  
場 所 新潟ワシントンホテル  
参考機関：20 参加人数：30

日本海側12府県の試験研究機関場所長が参考し、ブロックの平成4年度の活動状況、平成5年度の事業研究計画について情報交換が行われた。

さらに、「地域における研究機関との連携の強化について」を課題とし、討議が進められ、日水研と各府県機関間の情報の流通と共同研究課題の設定の必要性が認識された。

## 日本海の組織調査に係る調査船等の実務担当者会議

日 時 平成5年2月23日  
場 所 新潟市 新潟会館  
参考機関：18 参加人数：75

日本海ブロックの水産試験場、所属船実務担当者を参考し、午前は新潟鐵工所新潟造船工場丸山明男設計課長より「調査船建造にあたって留意すべき点」、日水研佐藤善徳増殖漁場研究室長より「浅海増殖場調査に係る諸問題」と題しての講演があった。

午後は、石川・富山・青森県水産試験場の調査報告と山口県外海・石川県水産試験場所属の新造船紹介があり、その他調査に関する協議を行った。

## 日本海ます類調査研究打ち合わせ会議

日 時 平成5年2月24日  
場 所 新潟市 新潟会館  
参考機関：12 参加人数：35

日本海北部6県及び北海道の日本海ます類調査研究担当者が一堂に会し、日水研から日本海ます類資源調査研究会議発足にいたった経緯について報告がなされた後、サクラマスの資源培養を推進するにあたっての問題点と今後の展望について協議を行った。そしてサクラマスを北海道を含む日本海北部の重要資源と捉え、海面及び内水面水試が相互に協力し合って、資源培養を推進して行

くことを出席者全員で確認した。今後、毎年定期的に会議を開催することとし、その論議の中から、共同研究のシーズを探索していくこととなった。

#### 平成4年度日本海ブロック地域バイオテクノロジー実用化技術研究開発促進事業及びバイテク利用魚類養殖システム開発事業合同報告検討会議

日 時 平成5年3月16日

場 所 新潟市 メルパルク新潟

参考機関：21 参加人数：28

養殖研究所 荒木和男細胞工学研究室長より「魚類の分子生物学的研究－孵化酵素遺伝子とトランスジェニック魚の作成について－」と題しての講演があった。

#### 平成4年度日本海ブロック増養殖研究推進連絡会議

日 時 平成5年3月17～18日

場 所 新潟市 メルパルク新潟

参考機関：26 参加人数：58

新潟大学教養部 浜田 哲 助教授より「魚類の性分化の制御機構」と題して講演があった。

#### 平成4年度第2回浮魚類長期漁況海況予報会議

日 時 平成5年3月17～18日

場 所 新潟市 新潟厚生年金会館

参考機関：18 参加人数：47

各機関による平成4年10月～平成5年3月の漁況と海況の経過報告、日本水研による海況及び漁況予測に関する基調報告を基に、平成5年3月～9月期の海況及びマイワシ、マサバ、マアジ、ブリの長期予報をとりまとめた。また、平成5年度200カイリ水域内漁業資源調査に引き続いて、日本水産資源保護協会石川宣次氏より「イカ類の加工について」、全国漁業協同組合連合会萬波鎮夫氏により「スルメイカの需給動向について」と題する特別講演が行われた。

#### 《人 事 異 動》

#### 青 森 県

4月1日付

目時 利悦 退職（鰹ヶ沢漁業用海岸局長）

田代 四郎 退職（水産試験場海運丸機関長）

中川 賢三 退職（△主査）

飯田 正明	水産試験場総務室長（水産課課長補佐）
榎本 静夫	△ 主幹（西北漁港事務所）
菅野 淳記	水産増殖センター所長（漁業振興課長）
神 和文	△ 総務室長（水産課海洋対策班長）
小倉大二郎	△ 研究管理員（栽培漁業公社研究管理員）
山口 伸治	△ 総括主任研究員（漁業振興課総括主査）
伊藤 秀明	△ 総括主任研究員（鰹ヶ沢地方水産業改良普及所主査）
涌坪 敏明	△ 主任研究員（水産試験場技師）
坪田 哲	△ 研究管理員（水産課主幹）
山内 高博	水産試験場主任研究員（△主任研究員）
松原 久	△ 技師（△技師）
蛇名 政仁	△ 技師（△技師）
村上 圭郎	水産部参事（水産増殖センター所長）
東 功	水産課課長補佐（△総務室長）
加藤 徳雄	漁業振興課主幹（△研究管理員）
柳谷 智	水産修練所主幹（△主任研究員）
大宮 利一	環境保健センター総務室長（水産試験場総務室長）
三戸 典芳	水産課主査（△主任研究員）
白取 尚美	漁政課技師（△技師）
木村 大	水産試験場研究管理員（総括主任研究員）
工藤 衛	鰹ヶ沢海岸局総括主査（局長）
小泉 広明	水産試験場技師（新規採用）
二部 勝幸	鰹ヶ沢漁業用海岸局技師（新規採用）
逢坂 健幸	なつどまり機関員（新規採用）
<b>秋 田 県</b>	
3月31日付	
三平 雄一	退職（水産振興センター環境部主任専門研究員）
4月1日付	
太田 文博	水産振興センター企画管理部長（秋田保健所五城目支所長）
平井 利昭	△ 企画管理部主査（消防防災課主査）
中林 信康	△ 技師（水産漁港課技師）

天野チサ子	企画管理部主査（主任）	タ一生産技術課専門研究員
佐藤 善雄	資源部長（増殖部長）	板野 英彬 海洋課専門研究員（内水面水産試験場養殖課専門研究員）
原子 博	環境部主任専門研究員（資源部主任研究員）	岩橋 正雄 栽培漁業センター参事生産技術課長（水産課副参事）
加藤 淳一	増殖部長（水産漁港課課長補佐）	富田 政勝 生産技術課専門研究員（内水面水産試験場病理環境課専門研究員）
古仲 博	増殖部専門研究員（主任）	伊藤紀久江 総務課主事（上越テクノスクール主事）
後藤与志雄	増殖部専門研究員（主任）	藤田 利昭 村上支場主任研究員（漁港課技師）
白幡 義広	増殖部専門研究員（主任）	村上 秀男 水産課課長補佐県沿岸漁場構改指導員（水産試験場利用増殖課長）
伊勢谷修弘	増殖部専門研究員（主任）	森田 興基 漁港課課長補佐（海洋課長）
山口 敬	農業技術交流館次長（水産振興センター企画管理部長）	丸山 克彦 水産課水産業改良普及員（利用増殖課研究員）
目繩 敏雄	文書広報課主査（企画管理部主査）	杉本 順子 相川高校主任（栽培漁業センター総務課主任）
斎藤 寿	水産漁港課主査（主任）	佐藤 雅彦 内水面水産試験場資源課専門研究員（専門研究員）
児玉 公成	水産漁港課技師（技師）	建原 敏彦 水産試験場海洋課長（漁業課長）

**山 形 県****4月1日付**

佐藤 久喜	水産試験場漁業情報専門員（水産事務所漁業情報専門員）
佐藤富二雄	最上丸主任機関士（水産事務所月峯主任機関士）
松井 俊二	浅海増殖部主任専門研究員（専門研究員）
平野 央	浅海増殖部専門研究員（研究員）
阿部 忠治	庄内支庁経済部水産事務所漁業調整専門員（水産試験場漁業調整専門員）
奥 晴夫	庄内支庁経済部水産事務所月峯主任航海士（最上丸主任航海士）
小野 保	庄内支庁経済部水産事務所月峯主任機関士（最上丸主任機関士）
秋野 亨	水産試験場最上丸航海士（新規採用）

**新潟 県****3月31日付**

大倉 正春	退職（水産試験場船舶技能員）
山吹 孝司	水産試験場漁業課長（栽培漁業センター生産技術課長）
土屋 文人	増殖課長（内水面水産試験場副参事）
川上 英雄	加工課専門研究員（栽培漁業セン

天野チサ子	企画管理部主査（主任）	タ一生産技術課専門研究員
佐藤 善雄	資源部長（増殖部長）	板野 英彬 海洋課専門研究員（内水面水産試験場養殖課専門研究員）
原子 博	環境部主任専門研究員（資源部主任研究員）	岩橋 正雄 栽培漁業センター参事生産技術課長（水産課副参事）
加藤 淳一	増殖部長（水産漁港課課長補佐）	富田 政勝 生産技術課専門研究員（内水面水産試験場病理環境課専門研究員）
古仲 博	増殖部専門研究員（主任）	伊藤紀久江 総務課主事（上越テクノスクール主事）
後藤与志雄	増殖部専門研究員（主任）	藤田 利昭 村上支場主任研究員（漁港課技師）
白幡 義広	増殖部専門研究員（主任）	村上 秀男 水産課課長補佐県沿岸漁場構改指導員（水産試験場利用増殖課長）
伊勢谷修弘	増殖部専門研究員（主任）	森田 興基 漁港課課長補佐（海洋課長）
山口 敬	農業技術交流館次長（水産振興センター企画管理部長）	丸山 克彦 水産課水産業改良普及員（利用増殖課研究員）
目繩 敏雄	文書広報課主査（企画管理部主査）	杉本 順子 相川高校主任（栽培漁業センター総務課主任）
斎藤 寿	水産漁港課主査（主任）	佐藤 雅彦 内水面水産試験場資源課専門研究員（専門研究員）
児玉 公成	水産漁港課技師（技師）	建原 敏彦 水産試験場海洋課長（漁業課長）

山口能生夫	水産試験場副主幹研究員（海区漁業調整委員会事務局書記）
小谷口正樹	主任研究員（栽培漁業センター主任研究員）
高縁 真	技術員（水産漁港課技術員）
岡本 勇次	栽培漁業センター主任研究員（水産漁港課主任）

北條 雄也	退職（水産試験場業務技師）
4月1日付	

湯口能生夫	水産試験場副主幹研究員（海区漁業調整委員会事務局書記）
小谷口正樹	主任研究員（栽培漁業センター主任研究員）
高縁 真	技術員（水産漁港課技術員）
岡本 勇次	栽培漁業センター主任研究員（水産漁港課主任）

萩原 祥信	水産漁港課主任（水産試験場主任研究員）	安達 辰典	タ 資源調査課研究員（主任研究員）
角 裕二	水産漁港課主任（タ 主任研究員）	川端 昭弘	タ 福井丸技師（主査）
谷井 富造	衛生研究所業務技師（タ 業務技師）	成田 秀彦	栽培漁業センター主任研究員（研究員）
幅 寿悦	水産漁港課技術員（タ 技術員）	<b>京 都 府</b>	
浜住 洋一	水産試験場立山丸技師（技術員）	4月1日付	
日又 伸夫	タ はやつき技術員（立山丸技術員）	東 昭生	退職（海洋センターワン次長兼総務部長）
森田 満	タ 立山丸技術員（新規採用）	船田秀之助	退職（タ 海洋調査部主任研究員）
<b>石 川 県</b>		田中 俊次	海洋センターワン次長兼総務部長（舞鶴失業対策事業所次長）
1月1日付		川本多佳子	タ 総務部専門員（宮津保健所専門員）
小谷内悦志	水産試験場技師（新規採用）	大橋 徹	タ 海洋生物部長（栽培漁業センター所長）
<b>3月1日付</b>		西廣 富夫	タ 海洋生物部主任研究員（水産事務所普及指導課長）
向井 和彦	水産試験場技師（新規採用）	岡部 三雄	タ 海洋生物部主査（栽培漁業センター技師主任）
4月1日付		清野 精次	水産事務所長（海洋センター海洋調査部長）
達 克幸	増殖試験場調査開発科技師（内水面水産試験場美川分場技師）	西村 元延	栽培漁業センター所長（タ 海洋調査部長）
勝山 茂明	のとじま水族館（増殖試験場調査開発科技師）	安田 和子	宮津地方振興局主事（タ 総務部主事）
戒田 典久	タ 調査開発科技師（新規採用）	城田 博昭	水産事務所技師（タ 海洋調査部技師）
<b>福 井 県</b>		桑原 昭彦	海洋センター海洋調査部長（主任研究員）
4月1日付		藤田 真吾	タ 海洋生物部主任研究員（海洋調査部主任研究員）
堀江 正美	水産試験場総務課長（商工振興課総務係長）	内野 憲	タ 海洋生物部専門員（海洋生物部主査）
山崎 達也	タ 総務課主事（県立病院主事）	中津川俊雄	タ 海洋生物部主任（技師）
和田 大輔	タ 技術開発課長（水産課課長補佐）	宮嶋 俊明	タ 海洋調査部技師（新規採用）
中島 輝彦	タ 技術開発主任研究員（栽培漁業センター研究員）	<b>兵 庫 県</b>	
鳥居 正三	栽培漁業センター主任研究員（若狭事務所専門員）	4月1日付	
岩本 克己	タ 主査（消防防災課主査）	塩田 敏雄	但馬水産事務所長（水産課参事）
渥美 正廣	タ 研究員（水産課主査）	反田 實	試験研究室主任研究員（水産試験場主任研究員）
中田 忠則	農林水産部参事（水産試験場次長）	本下 堯敏	水産課課長（水産事務所長）
川道 明	監査委員会事務局主任監査員（タ 総務課長）	安信 秀樹	水産試験場研究員（試験研究室研究員）
野崎 俊宏	商工振興課主事（タ 総務課主事）	<b>鳥 取 県</b>	
山田 洋雄	水産課改良普及員室技師（タ 技術開発課技師）	4月1日付	
榎谷 吉男	若狭事務所主査（タ 主査）	大西 宏好	退職（第二鳥取丸機関長）
矢野 由晶	水産課技師（タ 技師）	堀 英和	水産試験場総務課主事（農蚕園芸課主事）
難波 高志	水産試験場技術開発課長（次長）		

木山 正一 ウ 総務課主事（米子土木事務所主事）  
 藤井 健二 厚生病院主事（水産試験場総務課主事）  
 松本 直樹 中小家畜試験場主事（ウ 総務課主事）  
 牟礼 昇 水産試験場第二鳥取丸主任機関士（新規採用）

**島 根 県**

3月31日付

仲村 忠俊 退職（水産試験場明風機関長）

4月1日付

木村 浩二 水産試験場総務課長（浜田総務事務所会計課長）

向井 哲也 ウ 三刀屋内水面分場研究員（隠岐支庁水産業改良普及員）

増田 保 栽培漁業センター総務主任（社会福祉部高齢者障害福祉課主任主事）

杉名 功 浜田技術校長（水産試験場総務課長）

角 敬 漁政課主任技師（ウ 三刀屋内水面分場主任研究員）

中西 章雄 雲南保健所予防係長（栽培漁業センター総務主任）

梢江 哲夫 水産試験場島根丸一等機関士（機関士）

砂廣 秀人 ウ 明風機関心得（機関士）

坂根 孝幸 ウ やそしま甲板員（島根丸甲板員）

大庭 奨宏 ウ 島根丸機関員（やそしま機関員）

**山 口 県**

4月1日付

菅 昭人 退職（水産試験場次長）

升田 豊 水産試験場長（水産部漁政課技監）

池田 武彦 ウ 次長（内水面水産試験場次長）

檜山 節久 ウ 漁業科長（ウ 環境生物科長）

尾串 好隆 ウ 専門研究員（栽培漁業センター専門研究員）

中原 民男 水産部水産課長（水産試験場長）

立石 健 内水面水産試験場水産増殖科長（ウ 漁業科長）

由良野範義 水産課主査（ウ 水産増殖科長）

高山 繁昭 水産課主査（ウ 専門研究員）

田井中 剛 柳井事務所普及員（ウ 技師）

角田 信孝 水産試験場水産増殖科長（専門研究員）

**日 水 研**

3月16日付

伊藤 剛 退職（企画連絡室情報係長）

林 英樹 庶務課庶務係（新規採用）

3月31日付

工藤 英郎 定年退職（企画連絡室長）

本間 瞳子 定年退職（資源管理部主任）

片桐 久子 定年退職（資源増殖部主任）

北村 勝哉 定年退職（みずほ丸操機長）

4月1日付

藤本 實 企画連絡室長（西水研企画連絡室長）

早川 陵穂 庶務課庶務係長（水産庁振興部沖合課底引き係長）

中村晴一郎 みずほ丸操機長（水産庁白萩丸操機次長）

井澤 力 ウ 甲板員（水産庁船舶予備員）

山田慶三郎 ウ 司厨員（ウ ）

坂上 純郎 中央水研会計課課長補佐（庶務課庶務係長）

坂井 友信 中央水研庶務課厚生係長（ウ 会計係）

林 英樹 西水研庶務課用度係（ウ 庶務係）

池田 勉 西水研海洋環境部長（海洋環境部生物環境研究室長）

古川 修悟 水産庁白萩丸操舵手（みずほ丸操舵手）

片野 勝 水産庁白竜丸司厨員（ウ 司厨員）

日中 隆介 南西水研しらふじ丸（ウ 甲板員）

平川 和正 海洋環境部生物環境研究室長（主任研究官）

大沢 祐規 庶務課会計係（新規採用）

西濱 士郎 海洋環境部生物環境研究室研究員（新規採用）

木所 英昭 資源管理部浮魚資源研究室研究員（新規採用）

村上 英樹 みずほ丸甲板員（新規採用）

山形県水産試験場専門研究員佐藤雅希氏には、去る5月4日フランス共和国モンブラン山系にて不慮の事故のため39歳の若さで急逝されました。故人の温厚誠実な人柄と職務に対する真摯な姿勢は今もって忘ることはできません。心から御冥福をお祈りいたします。

## 計 報

かねてより病気療養中でありました、前日本海区水産研究所企画連絡室長工藤英郎氏は平成5年5月23日午前8時19分すい臓ガンのため死去されました。享年61歳でした。

故工藤氏は、昭和7年6月青森市に生まれ、昭和32年に東北大学大学院修士課程を修了し、同大学農学部助手として勤務した後、昭和37年8月水産庁に出向し、東北区水産研究所海洋部海洋第一研究室に配属され、以来一貫して東北沿岸水域の海況に関する研究に携わってこられました。

昭和63年4月、組織改変によって新しく誕生した日本水研海洋環境部の部長に就任し、科学技術庁プロジェクト

研究「深層水資源の有効利用の技術開発」の日本海側グループ責任者として陣頭指揮をとり、世界的に注目されたこの実験を成功に導きました。平成3年4月からは、企画連絡室長として研究部門の調整に努め、平成4年11月、心ならずも病に伏すまで30年の長きにわたり、水産研究及び水産業の発展に貢献してこられました。

氏は誠実、温厚な人柄であり、また新潟の米と酒をこよなく愛された日水研の5年間でした。

ここに在職中の皆様の御交誼に感謝するとともに、謹んで哀悼の意を表します。

(企画連絡室長)

## 編 集 後 記

◇日本海区水産試験研究連絡ニュースNo. 363をお届けします。今回は、日水研職員から寄せられた各種報告に加え、ブラック水試から寄せられた人事異動を掲載しました。ご協力ありがとうございました。

◇西海区水研の企連室にいたころ、各水研から出版されているニュース類を整理したことがあります。群を抜いて厚みがあったのが本誌でした。今回、この歴史あるニュースの発祥を調べたところ、発刊は昭和26年1月で52年までは月刊であることを知りました。また、内容がとても変化に富んでいて、発行に対する情熱と努力には頭の下がる思いです。

◇発刊の動機について、内橋潔所長は「北は青森から南は山口迄の間にある一府十一県の位置はかなり離れて

いるが、(中略)日本海水域という舞台に於て、各種の研究調査課題を展開しているのであるから、密接に連絡し協同し協力する事が当然の事と言ってよい。

(中略) 私共はこの連絡ニュースを日本海の水産研究を効果的にする傳導路として愛育につとめ、(中略)漁民大衆の福祉の基盤の構築に役立ちたい事を切望している」と述べられ、また、あとがきには「廣く外部より有益な資料を集めんべく研究中であります」とありました。

◇「初心忘れるべからず」。次号からは、広く原稿募集を呼びかけ、内容を充実し、変化に富んだものにしていきたいと考えています。よろしくご支援ご協力の程、お願いします。

### 連絡ニュース編集委員名

藤本 實・梨田一也・平井光行・梶原直人